

大八洲開拓農業協同組合の歩み

大八洲開拓農業協同組合

< はじめに >

今を去ること70数年前、旧満州東北の平原に開拓農業を志した仲間が、昭和20年8月、敗戦とともに希望と前途を絶たれ、はるか満州の異国の地に取りのこされ、避難の道を奪われてから約1ケ年の流浪避難、そして越冬生活の間に幾多の同志と家族を失った生き残りの者がようやく故国にたどり着き、安住の地を求めて昭和21年11月10日、菅生村樽井に第一歩を印してから早や70年の歳月が流れています。

戦後間もない混乱の最中、多数の婦女子を抱え、生活に在り付くために必死で貧しくあさましいばかりの集団であった私ども大八洲の当時を振り返ると、今や夢のような変わり様に、只々感慨胸に迫るものがあります。

顧みるに、入植した鬼怒川と利根川に囲まれた菅生沼地帯は、毎年河川が増水する度に作物は流され、収穫皆無の食料飢饉の状態が6年も連続する有様で、固い決心で再び開拓の鋤を手にした意志は動揺、気力も自信もなくし失望することの繰り返しでありました。

昭和24年から開墾をはじめた台地の立沢地区は、蒔き付けた作物も成長はおろか草も伸びない程の強酸性火山灰土壌の常習旱魃地帯で、収穫を得るまで10年近くかかりました。

このように、農業年産は一向にあがらず、組合経営は行詰まり、開拓の前途を見失った時期は再三ありましたが、入植した限りはあくまでも落伍者を一人も出すまいと、10年にわたり共同による生活と経営を続けるとともに、組合員の生活営農並びに組合組織の基盤づくりをはじめ、事業のすべてを、共同体制で乗り越えてきた70年の道のりは、組合員の一致協力による共同活動の歩みでもありました。

未曾有の大戦終結で極めて混沌とした世情にもかかわらず、開拓行政の樹立とともに、県の行届いた開拓施策、関係市町村の暖かい受入態勢、更に関係機関並びに各種団体の御指導と開拓組織の御協力など、各方面から蒙った多大なる御支援と、それにも増して入植地域の皆様には緑も由かりもない引揚者の私どもを快く迎えて下さるとともに、心温かい御援助を数限りなく賜りましたお陰により、幾度となく挫ける心を支え立直ることができました。

この厚い御恩は、私どもは決して忘れることはありません。また各界並びに地元の皆様から賜りました尊い真心にお報いすることは、私どもの一生を通して果たせることはありません。

初代組合長 故佐藤孝治が申しておりました。

「開拓の仕事を成し遂げるには三代かからねば出来ないが、開拓が受けた大恩に報いることは吾々孫子の代までかかっても至難な業である。せめて開拓をさせて良かったと言われる仕事を只の一つでも残しておきたい。」との生前の佐藤孝治団長が言い残した念願に応えることは、今の私どもには到底力不足である事は十分承知しておりますが、少なくとも地域の邪魔者にだけは決してならないように、将来にかけて皆様と和を保ち地域との共栄に心懸けて参る所存であります。

大八洲開拓の変革期を迎える私どもは、入植70年の大きい節目を契機に現下の厳しい農業環境を切り拓くため、また地域農業の維持発展の一翼となれますように、更に決意を新たに再出発いたしたいと存じますので、皆様各位には変わらぬ御指導とご鞭撻を賜りますよう懇請申し上げます。

この度は、私ども大八洲開拓の創始者である大八洲開拓初代組合長 佐藤孝治団長の郷里の皆様のご訪問を賜り、今は亡き初代組合長や開拓一世の同士達の慶びはどれ程のものか。さぞかし想像を絶する感慨に浸っている一人一人の歓喜の姿が脳裏に飛び込んで来ます。

大八洲開拓発祥の原点である 郷里真室川町の皆様をお迎えできることを誠に光栄に存じ、多くの今は亡き開拓一世達や現大八洲開拓組合員一同に代わり深く感謝の意を衷心より厚く御礼申し上げますとともに、皆様の御健勝を御祈念申し上げまして御挨拶とさせていただきます。

平成 2 9 年 7 月 1 1 日

大八洲開拓農業協同組合
代表理事組合長 杉原利昭

歴代組合長

初 代



佐藤 孝治

第 2 代



高橋 辰左エ門

第 3 代



鈴木 信

第 4 代



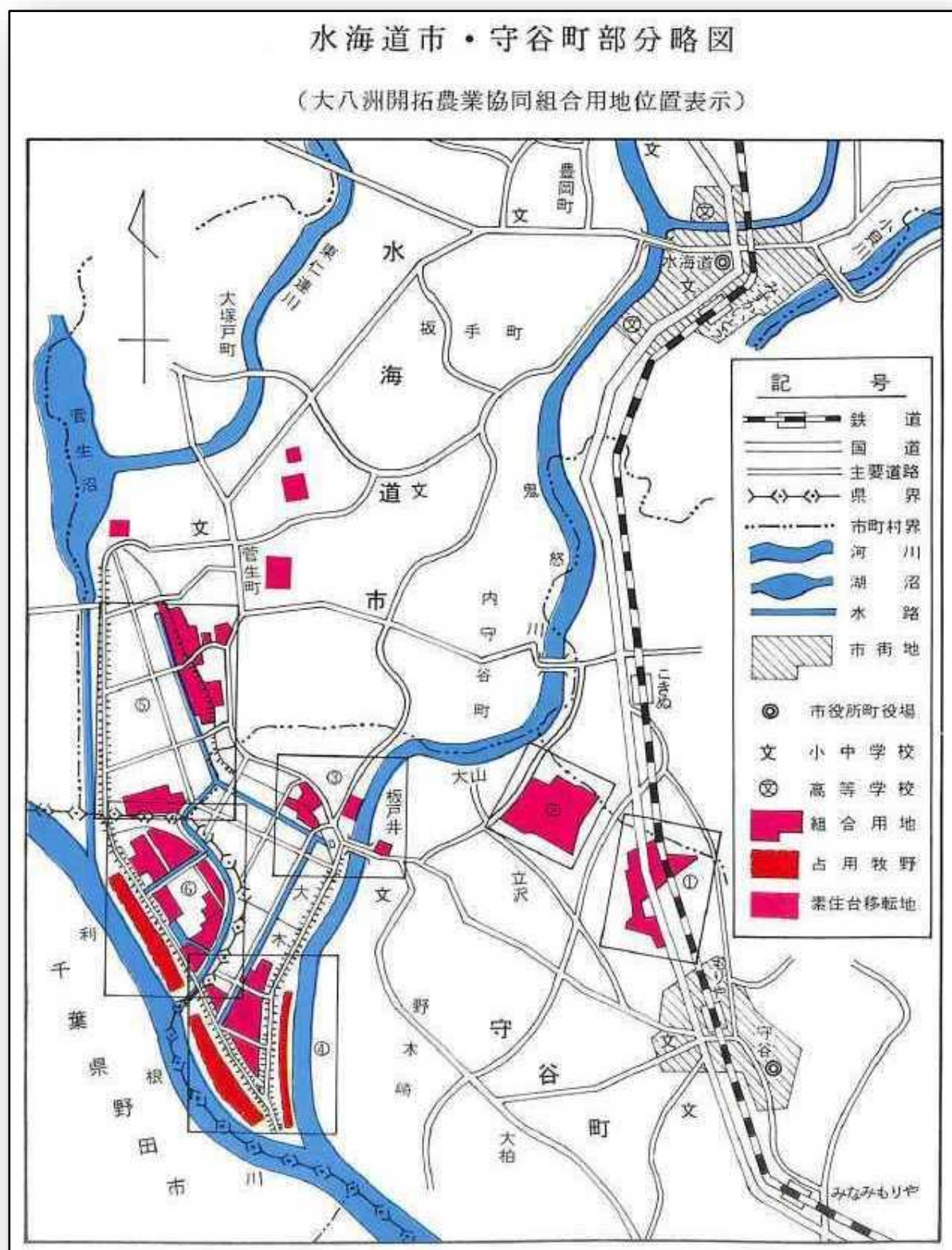
石田 時雄



組合事務所

1 開拓地の所在

茨城県北相馬郡守谷町（現 守谷市）大井沢地区、水海道市（現 常総市）菅生地区にまたがる菅生沼地区（千葉県野田市木野崎地区柳耕地を含む）



佐藤 孝治 著「大八洲開拓史」（昭和49年発行）より転載

※図中①～④各地区詳細は、本資料13ページ以降を参照

2 地区の概要

(1) 菅生沼地区

北相馬郡菅生村（現 常総市）及び大井沢村（現 守谷市）に跨る利根川、鬼怒川の合流点に近い地域で、デルタ地帯の国有河川敷地と民有採草原野及び沼沢湿地帯である。

大正時代より進められていた利根、鬼怒両河川の堤防工事は戦時中に中止されたまま放置されていたが、戦後、内務省（現 国土交通省）によって工事が再開された。

地区内の開拓建設工事は、農林省（現 農林水産省）所管で進められ、茨城県農業会が事業主体（昭和23年に事業主体が県に移管）となって代行開墾建設工事が着手されたが、堤防が完成するまでの約10年間、利根川と鬼怒川が増水する度に地区内が濁流の溢れる常習水害地であった。

昭和30年に堤防が完成したが、その一部280mにわたり堤防の高さより低い「溢流堤」があり、常に水害の危険に晒される遊水池となっている。

(2) 大井沢地区

大井沢村の高台の関東ローム台地の民有平地林及び原野を緊急開拓行政に基づく未墾地開放により、政府が民間から買収し、小団地補助開墾地区として、昭和24年に開墾建設が進められた地区で、菅生沼地区とは反対に瘠薄な強酸性の旱魃地帯であったので、作物を栽培しても収穫どころか草も伸びない状態が長く続いた不毛に等しい土地であった。

3 組合の概念

大八洲開拓農業協同組合は、守谷市と常総市菅生町の地域において、概ね四つの団地にまたがり四集落を編成するとともに、農業経営形態は団地の諸状況に合わせて酪農、養豚、肥育牛、水田作の四部門からなり、その団地の特質を考慮し、個々の経営と云うより団地を主体に営農形態及び経営の規模拡大を図ってきた。

これは、満州開拓時代に培われた共同組織に根差した大八洲開拓の組合理念に基づくもので、農業経営が組合事業の中心であることは勿論であるが、それを運営する人と組合員及び組織の一体化により、後継者の育成、保健対策、冠婚葬祭の行事、人事の相談に至る諸施策を組合事業の一環として処理できる態勢を整え、徹底した組合保障制度のもとに「組合員が有事の際にも安心して生活と営農に専念できる組合運営」を基本にした組織共同体である。



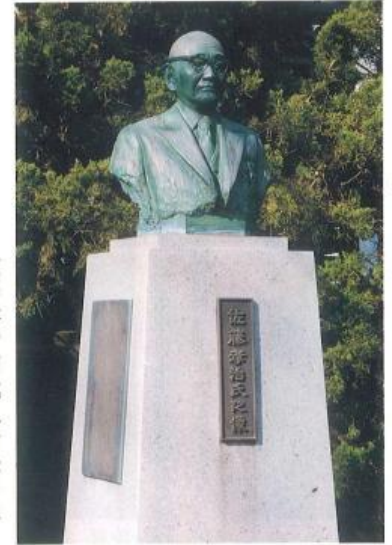
組合事務所前に立つ開拓の碑

4 組合の沿革

(1) 大八洲開拓農業協同組合の設立

昭和21年に満州開拓から引き揚げ帰国した生き残りの一部40戸が、土地の人も放置していた遊水地帯の荒廃原野に再び開墾の鋤を振るって、満州で果たせなかった希望を実現するため、大八洲開拓の再建に踏み出し帰農組合が発足した。

その後、昭和23年に帰農組合を解消し、農協法に基づく農業協同組合を結成、翌24年と32年の二回にわたり満州開拓団員の復員者及びその他合流した同志の入植承認が得られた36戸と、その後に新規加入の3戸を加えた組合員で組織している。



佐藤孝治初代組合長の像

(2) 不振組合の建直し

入植当初から生活及び経営を全面共同で開墾と耕作に当たってきたが、昭和22年から28年の間、相続いて春秋の水禍に見舞われ、収穫は一粒もない程生産のあがらない状況にあり、大半が食生活に消えた借財は年々嵩み、政府借入金の償還は滞る一方で、当局から不振地区に指定されるとともに、昭和30年頃には開拓の前途は非常に危ぶまれ窮地に立たされた。

ところが昭和30年秋に念願の堤防もようやく完成し、昭和32年から政府の開拓振興対策の実施により再建の道が開かれた。

その矢先、昭和33年9月、台風22号による溢流被害に引き続き、世紀の災害をもたらした翌年8月の台風7号は、溢流堤を根こそぎ決壊し、田畑を押し流し、流作地区の組合員住宅をはじめ畜舎やすべての建物は、全半壊するなど、耕作者41戸の組合員に離農を考える程の極めて深刻な打撃を与えるに至った。

しかし、建設省の突貫工事により一年で溢流堤は改良復旧され、組合の共同体制で住宅、畜舎など建設工事を進め、難局の打開に努め、国県市町村の関係当局及び関係団体、開拓者組織、各界あがての指導援助により奇跡的に復活することができた。

昭和38年から、第二次振興対策が実施される等、継続した開拓政策の支援を受け、組合員の営農意欲と生産力の向上とも相まって、組合事業の運営及び借入金の償還も軌道に乗りはじめた。

昭和50年頃には開拓行政が一般農政に移行しても支障がないまでに立ち直ることができ、組合の多額の負債も平成2年には完済し、入植から長年続いた苦しい借金経営から開放されることができた。

(3) 素住台地区の開墾と移転

山林跡地を開墾した大井沢地区の守谷（大原）に14戸、立沢（素住台）に21戸が流作と浅間山地区から分派遣入植した組合員は、1.6haの配分土地のうち、10aの



大原公民館

宅地を除き耕作したものの、早霜害と酸性度の強い瘦地のため、作物は一向に獲れなかった。

昭和30年に深井戸を掘削して、畔間灌漑を施したが、漏水激しく成果がないので、昭和38年からスプリンクラーによる灌水施設を施工するとともに、豚、乳牛を飼い、堆厩肥の多量施用を図り、土質の改良に心血を注ぐこと約20年、ようやく見事な耕地に仕上げる事ができた。

ところが、守谷町に国の計画に基づく公団住宅造成計画が進められ、北守谷団地用地として区域内の大原組合員の一部農地と素住台21戸の生活営農基盤の全域を提供した。

その面積の2分の1（2割から4割の減歩）を団地内に換地を受け、素住台開拓地から移転することが、昭和45年によりやく本決りとなった。

移転問題には、紆余曲折はありながらも、組合は守谷町の都市開発に協力する意志のもとに、事前に土地購入資金を借入れ、移転用地の買収を進めていた。

そして土地明け渡しまでの撤去作業や移転先の建設工事、その他関係一切の仕事を組合事業として計画実施して、土地代及び移転補償料の有効利用を図り、事業の完遂とともに昭和47年度末に全員の移転を終了した。移転先の一集団構成は残念ながら果たせなかったが、農地面積の倍增並びに生活営農施設の拡充改良と更新ができたことは、経営規模の拡大につながる予想以上の成果であった。

土地代金と移転補償料ともに、当時にしては多大な金額にのぼり、組合員が一時の大金に惑わされ、浪費や離農に走ることを憂慮したので、代金の受払いも組合の一括管理の下に推進した。その組合の方針に全員が同意するとともに、他の組合員も事業に協力し、開拓挙げて遂行できたことは、本来の共同体制が生きていた証であった。

(4) 菅生沼耕地と流作地区

この地区に入植した流作と浅間山組合員の配分土地は、1.2haと面積が少なく、農家として自立するには、耕地の拡大がもっとも必要であった。

昭和35年に決壊した溢流堤の復旧工事の完成に伴い、水田耕作に意欲を持ち、少しでも耕地を増したいと願っていた。

その折、千葉県福田村（現 野田市）の木野崎（柳耕地）地区に水害のため耕作放棄していた農地の買収交渉が昭和42年に成立し、約27haを買い受け、その周辺10ha近くの跡地も借り受け、80aの区画圃場の開田工事を組合自費で施工し、両地区の組合員に配分し耕作した。

その後、旧利根川の廃川敷4haを水田に造成し、水稻単作農家が払い下げを受



素住台公民館



流作公民館

け、耕作面積の増大を図った。

その他、素住台地区の移転用地の買収に絡んで水田も買受け、水稻耕作の規模拡大を図り、水田面積は、100haに達した一方、流作地区複合経営（水田と酪農）農家の乳牛多頭化による労働軽減と経営規模拡大を促進するため、昭和44年にライスセンターの設置と大型コンバイン（国外製）を導入し、米麦の刈り取りから乾燥、粳摺り並びに農業倉庫（政府米の保管）を建築し、政府売り渡しまで一貫処理するとともに、米の精白加工と販売を実施している。

菅生地区は、昭和33年に菅生沼土地改良区が設立され、平成6年には二回目の基盤整備事業が施工されたほか、木野崎（柳耕地）地区も平成8年秋から再び圃場整備事業が着工され、これらの面積436haにのぼる穀倉平野が展開している。

しかしながら、入植した浅間山地区は菅生地区の台地に宅地を求め安住することができたが、流作地区21戸は、鬼怒川と利根川のデルタ地帯に1,000頭近い乳牛とともに、不時の溢流水害の不安を抱えながら暮らさねばならず、災害による生命財産の危険を孕んだ遊水池であることに変わりではなく、それが大八洲開拓の宿命として諦めなければならないのか、このことは誠に筆舌に尽くし難い痛恨事であり、50年先も忘れることのできない忍び難い大八洲開拓の最大なる内憂であり、その解決はまさに今や焦眉の急であった。



浅間山公民館

5 組合の畜産

(1) 有畜農業から専業経営

開墾地の地力増進は、開拓の急務であり、それには家畜を飼って有機肥料の多量施用を必要とするとともに、満州開拓から有畜農業を目指してきたので、人間の食料にも窮した入植翌年から、鶏、家鴨、山羊、緬羊、豚、役牛馬、乳牛の大小すべての家畜を導入して共同飼育に取り組んできた。

組合員の生活営農の拠点が決まり個人経営に移行した昭和31年頃から豚又は乳牛の飼育に意欲的に歩み出した。

組合は昭和41年に種豚センターを設置し、肥育用素豚の繁殖生産を行い、養豚家の多頭化を進めた。

昭和40年頃から乳牛の導入及び繁殖に力を注ぎ、45年には成牛600頭に達し、乳子牛の生産も伸びてきたので、乳子牛哺育センターを設け、酪農家の乳雄子牛を引き取り、哺育から肥育の一貫経営で乳肉牛の生産を手掛けるとともに、肥育牛養豚酪農の各専業経営の農家育成を進めてきた。

しかし、世代交替とともに専業農家は減少の傾向にあり、現在の家畜保有数は肥育牛約500頭、豚3,500頭、乳牛1,500頭を各々飼育している。

(2) 自給飼料対策

家畜の多頭化を進めるには、飼料の自給度を高め、生産コストの低減を図らねばならないので、飼料畑を確保するため、昭和35年から鬼怒川と利根川の両河川敷

を借受け、改良牧野を造成して牧草や飼料を耕作した。

当初の面積は、21haであったが、家畜の増加に伴い年々利用面積も増し、河川敷占用面積は100haを超えるに至った。

その他、組合員内の離農家及び養豚専業農家の所有畑の全面積並びに組合員外からも借受け、約200haを耕作し、自給飼料を確保するとともに、大八洲畜産振興部会を結成して、現下の厳しい畜産経営の再建に会員と組合が一体となり対応している。

(3) 農業機械の普及

入植当時から役牛馬により犁、カルチベータ、ハローなどを使用した人畜力を中心に行ってきた農耕が、昭和35年頃から耕起や整地作業は畜力に代わる歩行トラクター、ロータリーなどが導入された。田植作業も昭和44年頃には人手から田植機に移ったが、昭和50年代になると歩行用から乗用に、トラクターをはじめ、あらゆる機械の大型高性能化した国産品も出廻ったので、国の農業近代化政策とともに、機械器具の普及が著しく進み、家畜の多頭飼育に伴い、飼料畑、並びに水田耕作面積の拡大とともに、機械及び施設の設備投資は、甚だしく増大せざるを得なくなった。

農畜作業の省力化、過重労働の軽減、経営の効率化を図り、規模拡大のためには、機械化及び施設の近代化は、欠くことのできない手段であるが、設備の過大投資による所轄農家の機械貧乏を招く結果は、是非とも防がなくてはならない問題として対処してきた。

(4) 機械及び施設の共同利用

稲作農家の一時的集中作業のため止むを得ない育苗、田植機及び栽培管理に要する小型農機具類及び酪農家の搾乳関係の最小限の個人設備を除いた耕転整地収穫等に要する大型機械については、各地区毎にトラクター利用組合又は酪農組合（何れも任意）を組織して、共同設置及び利用管理を行っており、酪農家は飼料の蒔付けのサイレージ及びラップの収穫作業は、共同作業を実施して稼働力の効率化と集中作業の労働力の負担軽減に相互協力を行っている。

家畜糞尿の処理については、各農家に糞尿流下式改良畜舎及び堆肥舎を設け、個別に処理してきたが、最近都市化が進行したため周囲から環境汚染に関する苦情が増えるとともに、家畜の多頭化により、糞尿処理にも個人的には限界に近いので、昭和59、60年の2年度にわたり、素住台地区に発酵堆肥センター2棟を共同設置した。

各農家が搬入した糞尿を発酵処理するとともに、完熟堆肥は組合員の農地に還元した他、組合員外の需要者にも現場に運搬して販売している。堆肥センターの経営は、畜産農家が堆肥センター利用組合を組織して運用している。

入植以来これらの農用機械及び施設の導入については、国の補助事業又は有利な制度資金の活用を図るとともに、施設の設備などについては、共同作業を実施する等、設置費の低減につとめ、過剰投資の抑制を図ってきた。

これまで組合員の共同により導入又は設置した機械や施設に対する補助金は2億数千万円にのぼっており、組合事業全般にわたる多大なる助成を受けてきた。その開拓施策並びに農業政策に深く感謝するとともに、将来とも組合の共同体制を崩

してはならないと考えている。

6 結 び

生まれも育ちも出身地も異なる他人同士の集まりが、貧困で不自由な共同生活と苛酷な試練や苦難な道をどうして纏まって今日までこられたのか、僅かな集団で小さい組織をここまで維持できたのか、その基因は一体何だったのか、この機会に再び回顧反省し、大八洲の未来開拓の手掛かりを少しでも掴むことができれば幸いと思っている。

満州開拓から惨憺たる流浪避難を経て、故国に引き揚げ再び開拓に入植したものの、相続く水害に困窮苦汁を嘗めながらの共同生活中にも、喜びも痛みも共に分かち合い、辛い時には励まし合い、悲しい時には慰め合い、倒れそうになると支え合って、険しい道も手を取り合って歩んできた。

そして悲しみや不幸の逆境を乗り越えてこそ真の喜びと幸せがあり、その歓びや幸せは同志の助けや協力なしでは決して達成することが出来ないことを体得した。そこで同志の家族的固いつながりが醸成され、組合員の組織的活動と組合の共同姿勢が成り立つとともに、共同協力の大切さを学びとった組合員及びその家族の「無力の力」こそが、わが大八洲開拓建設の唯一最大の原動力であった。

しかし、大八洲開拓も人間の集まりである限り、辛くて嫌なこと、面白くないこと、無駄なことの繰り返しでもあった。水害等により苦汁に満ちた暗澹たる「開拓」を諦めたり、貧困と苦難に挫けることも度々であった。

それに対し、反省し、奮起して敢然と立ち直ることができたことは、満州開拓に犠牲となった幾多の同志や家族の靈魂の導きと固い絆で結ばれた嘗ての同志の霊前に、大八洲開拓の再建を誓った組合員をはじめ開拓が一丸となって諦めないで頑張り抜いた結果であると考えている。

何一つ取柄のない集団にも、事ある度に個人の利害を越えて組合の掲げた理念を目標に共同協力して、全くの「無」からこれまで築いてきた70年の歩みは、次代を担う者の糧であると思っている。

満州大八洲開拓団の発足以来、約70年の伝統とも云える共同精神と組織的活動を基本とする組合の協力体制を失うことなく、次世代の青年も前進を続けていくならば、如何なる多難な前途も道は拓かれ、次の目標である大八洲開拓70年は云うに及ばず、100年の歩みも、確固たるものと信じ、ここに所信の一端を述べ結びの言葉といたします。

参 考 資 料

【関連事業】

○畜産基盤再編総合整備事業

〔概要〕

大木流作地区には、当時 21 戸（うち酪農営農 14 戸）の住宅があり、営生調整池内であることから、長年水害により生命・財産を脅かされてきたが、平成 14 年に国土交通省による堤防（鬼怒川）拡幅工事に係る補償契約を締結し、住宅の地区外移転を進めていた。

しかし、酪農施設については、市内にまとまって酪農を営む場所が無く地区外移転が困難となり、現在地での営農継続にあたり、施設の近代化・合理化を図ることとなった。

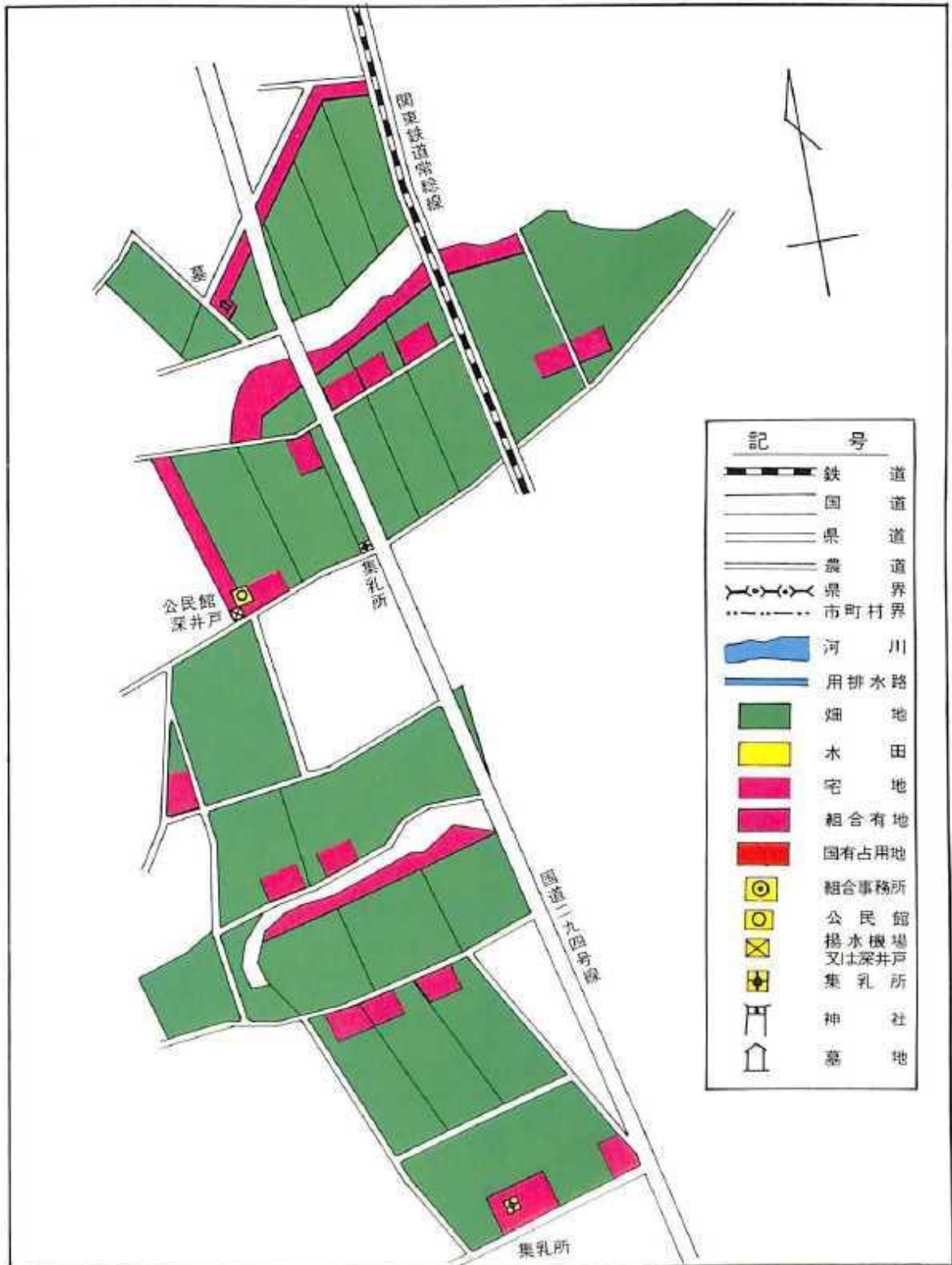
- ・ 実施年度：平成 15 年度～平成 19 年度
- ・ 事業主体：（財）茨城県農林振興公社
- ・ 事業計画： 草地造成 18.6ha，草地整備 13.5 ha
施設用地造成 6.9 ha，用水施設整備 629.8m
排水施設整備 390m，道路整備 1,045m
農業用施設（畜舎 9 棟，家畜排せつ物処理施設 3 棟・1 基）
- ・ 総事業費：1,383,750,000 円 ・ 参加戸数：10 戸



『ミルク工房もりや』

[illegible]

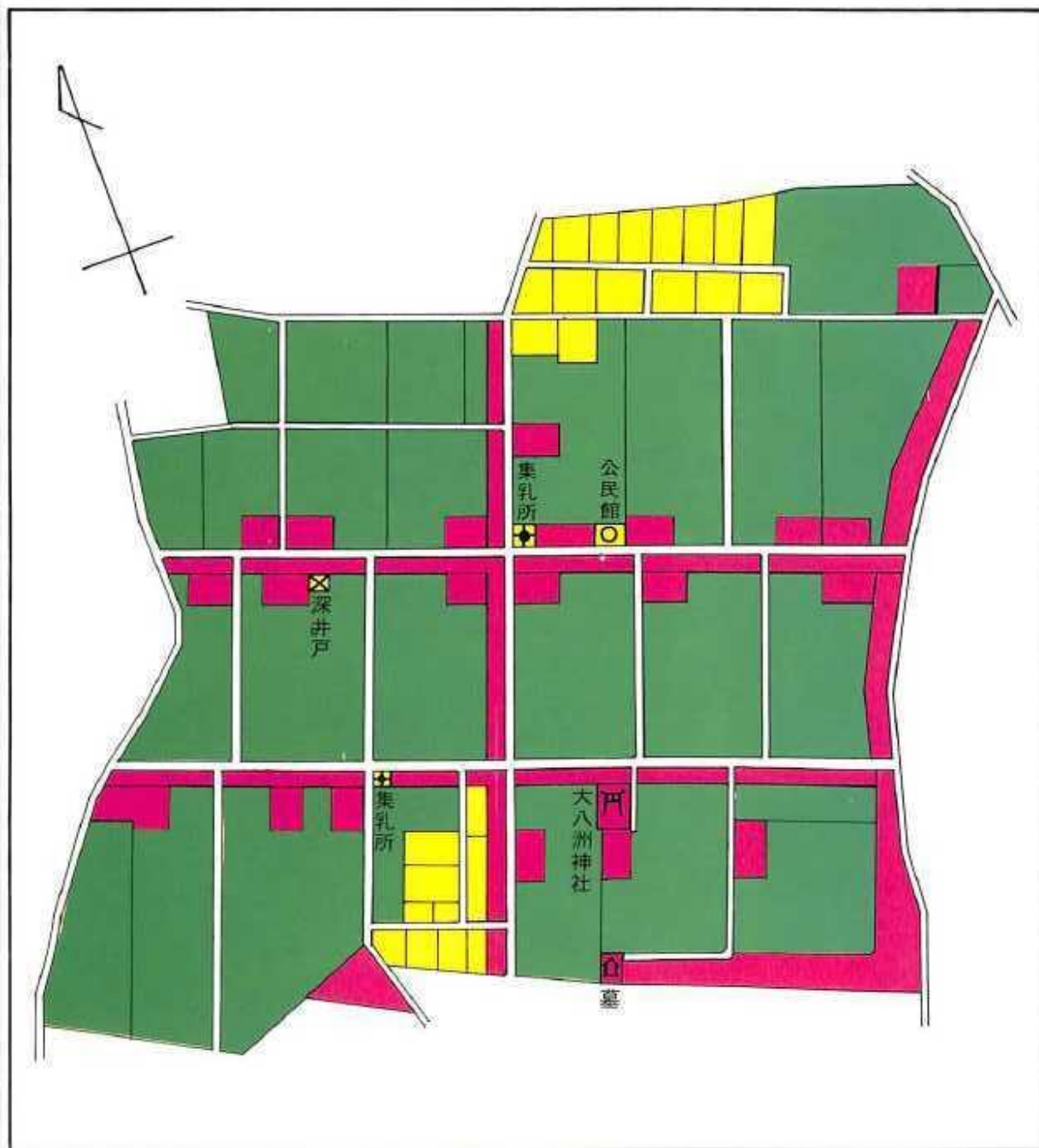
① 大井沢地区，大原農場
(守谷町守谷)



佐藤 孝治 著「大八洲開拓史」(昭和49年発行)より転載

② 大井沢地区，素住台農場

（守谷町大字立沢）

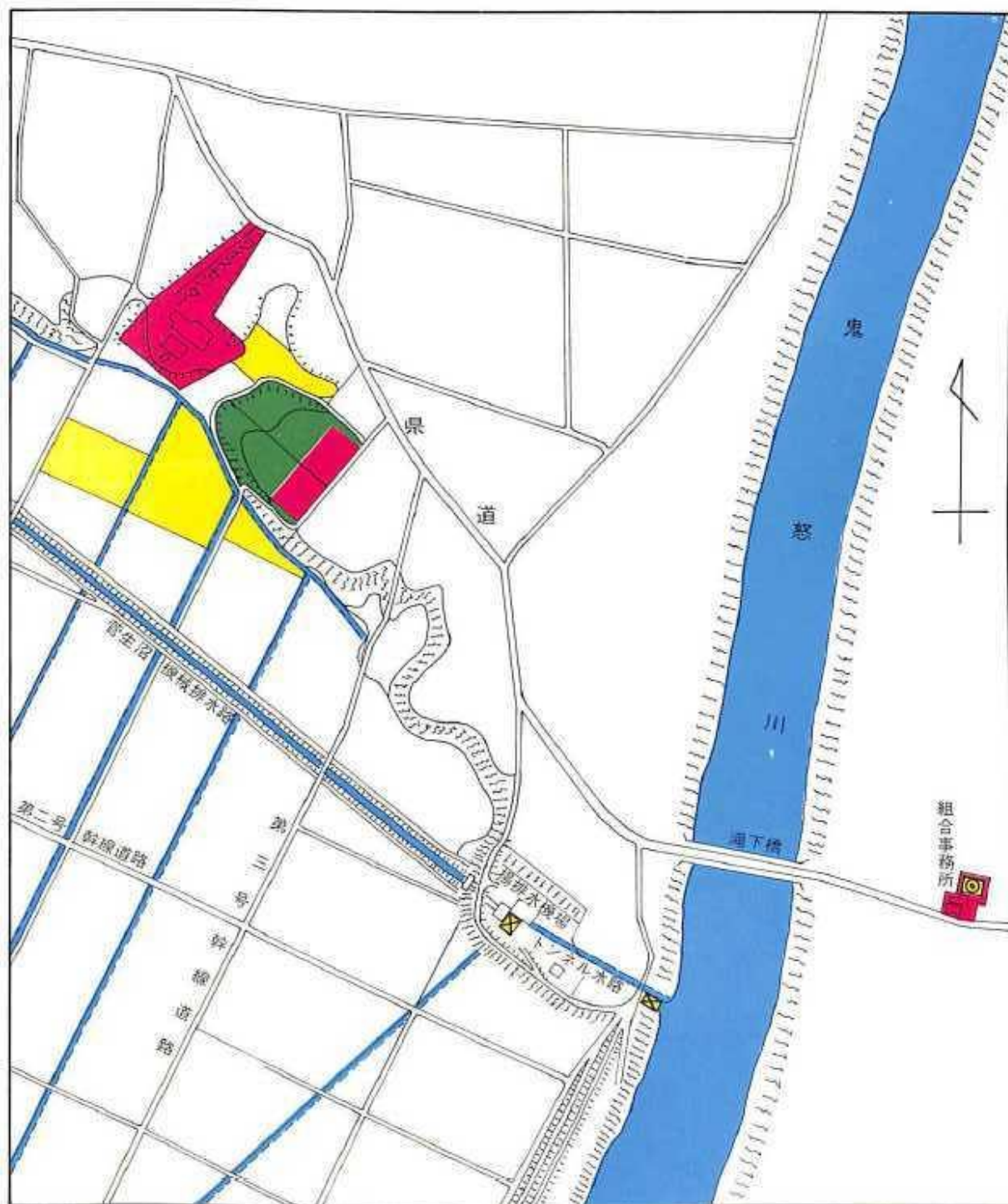


佐藤 孝治 著「大八洲開拓史」（昭和49年発行）より転載

③ 菅生沼地区，板戸井農場

（守谷町大字板戸井）

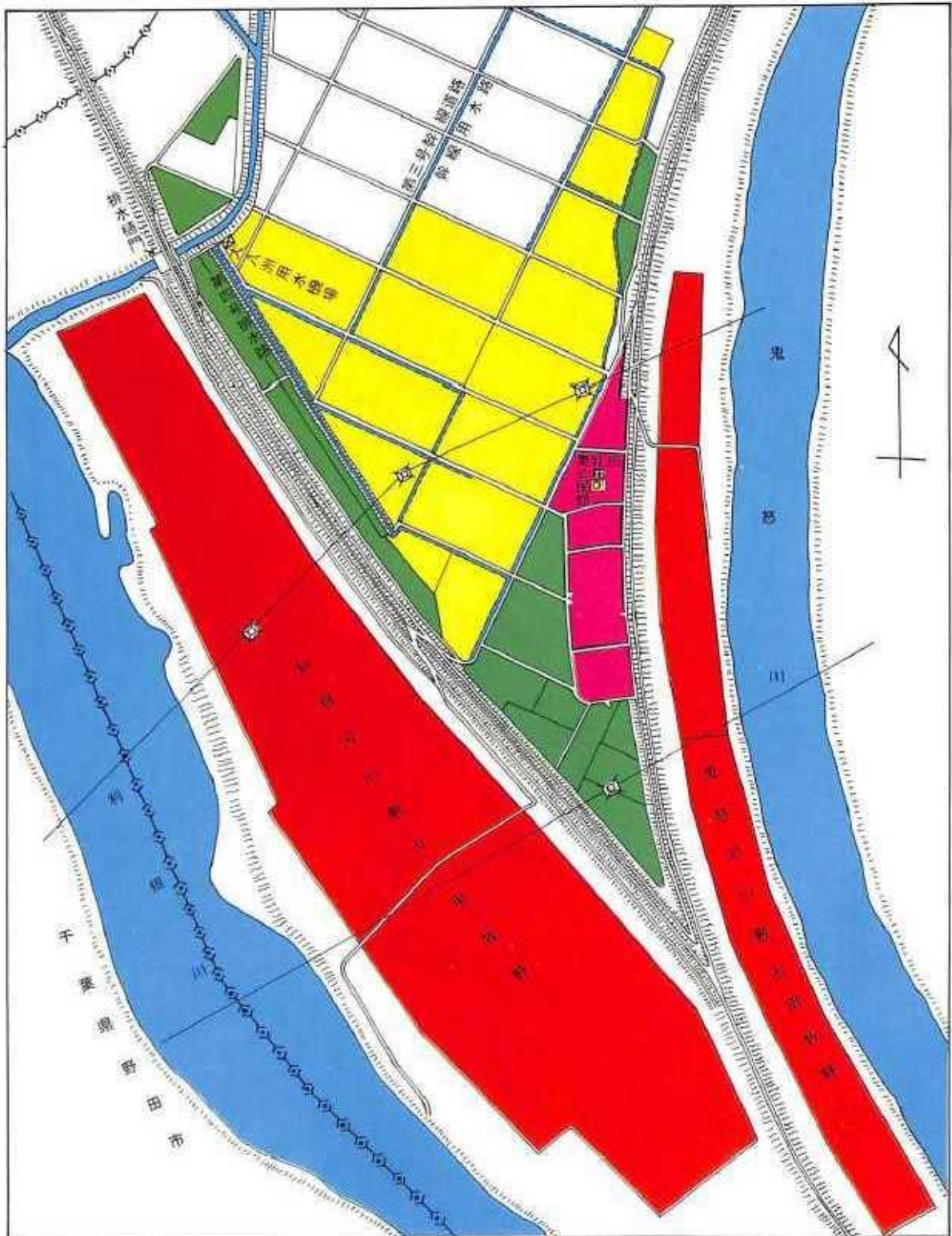
（付 大八洲開拓農協事務所・ライスセンター・菅生沼土地改良区揚排水機場位置）



佐藤 孝治 著「大八洲開拓史」（昭和49年発行）より転載

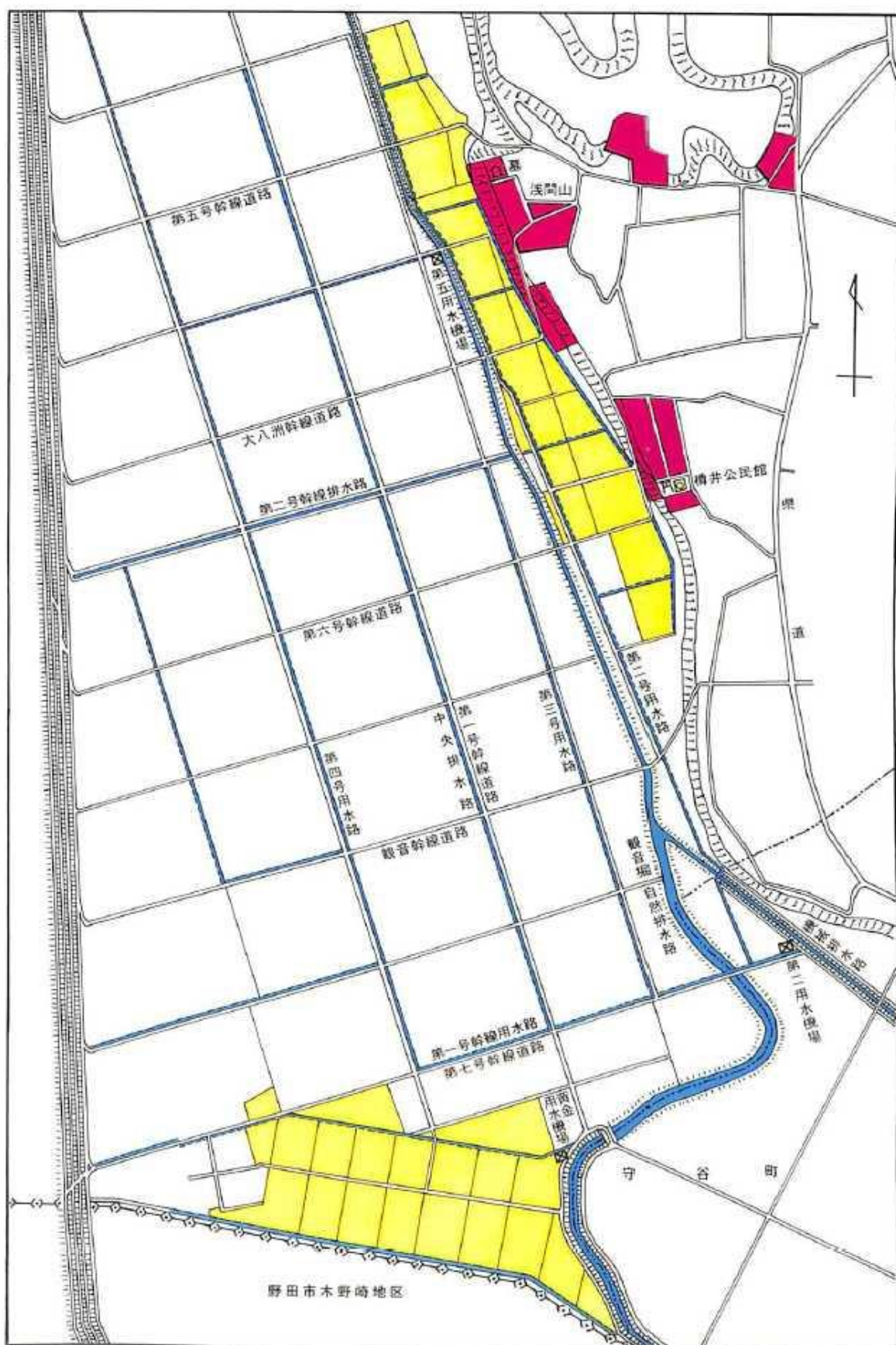
④ 菅生沼地区，流作農場

(守谷町大字大木)



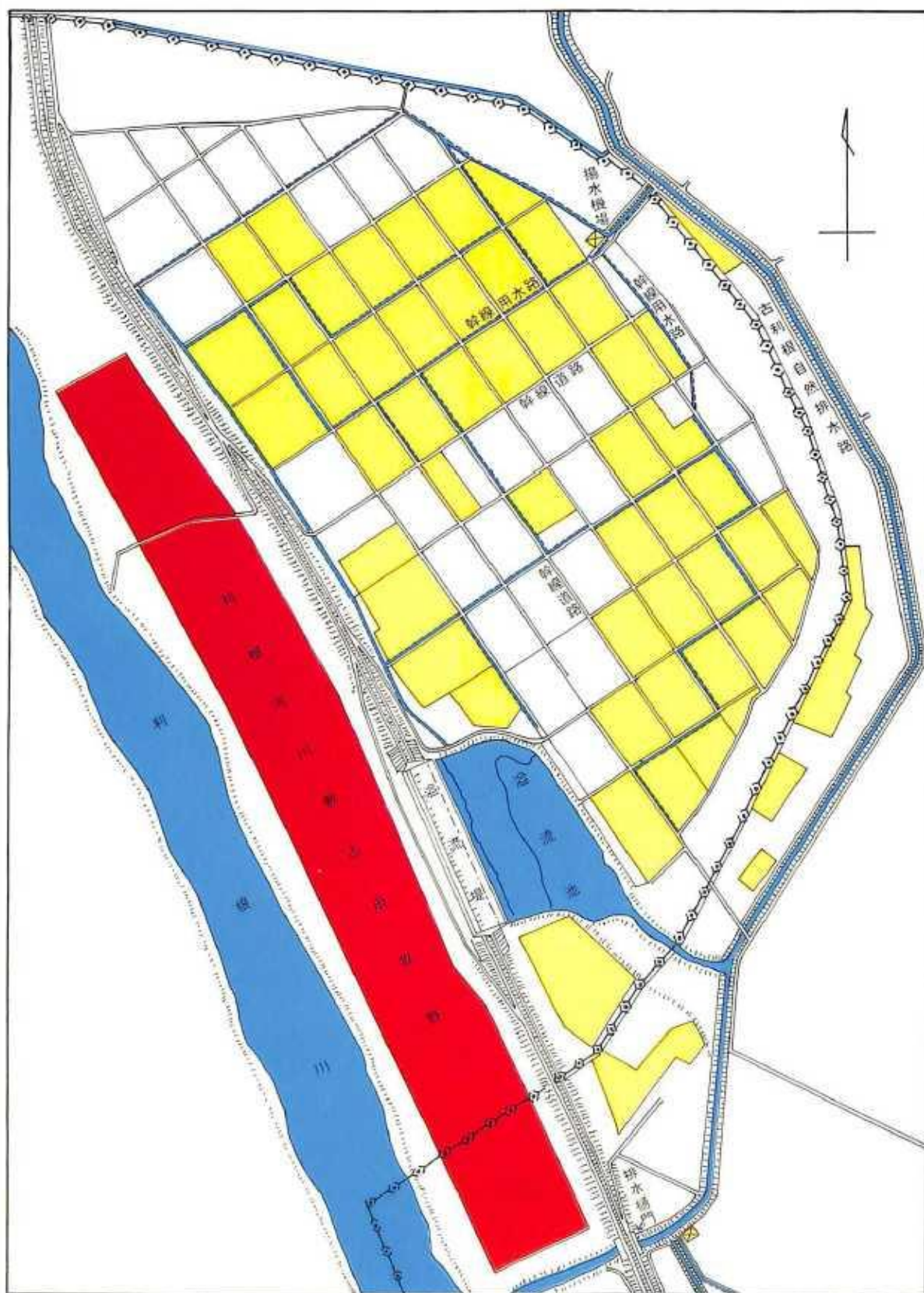
佐藤 孝治 著「大八洲開拓史」(昭和49年発行)より転載

⑤ 菅生沼地区，浅間山農場（水海道市，菅生町，黄金，古利根）



佐藤 孝治 著「大八洲開拓史」（昭和49年発行）より転載

⑥ 木野崎地区柳耕地配置図（野田市木野崎地先）



佐藤 孝治 著「大八洲開拓史」（昭和49年発行）より転載